Osaka University Knowledge Archive

Title	大阪大学における教育の国際化への取り組み : 「教育の国際化推進のためのFD事業 : 英語による講義のためのワークショップ」を終えて
Author(s)	有川, 友子
Citation	大阪大学大学教育実践センター紀要. 2005, 1, p. 97-105
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/11300
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

『大阪大学大学教育実践センター紀要』第1号（2004），pp.97－105

【報　告】

大阪大学における教育の国際化への取り組み

――「教育の国際化推進のためのFD事業：英語による講義のためのワークショップ」を終えて――

有　川　友　子

Internationalizing Education at Osaka University: A report on "FD Workshop for Courses Taught in English"

Tomoko ARIKAWA

This paper reports on the FD workshop for the faculty members teaching courses in English, which was held at Osaka University in October 2004. The experienced instructor from McGill University, Canada, was invited to Osaka University to conduct the workshop in McGill style. McGill University is a partner institution of Osaka University, and is very famous for its research and experiences in the field of Educational Psychology, university teaching and learning, as well as conducting FD workshops. The workshop was conducted in McGill style for five days with lecture, practice, and microteaching. This workshop at Osaka University had ten participants due to the schedule of workshop and other problems. However, the participants learned the importance of this kind of workshop and were very satisfied with the workshop. This paper analyzes this workshop in the context of Osaka University, using the feedback from the participants, and discusses the points of considerations for conducting such workshops in the future.

Key words: Internationalizing education, higher education, Faculty Development, workshop, North America（McGill University, Canada）

Ⅰ．はじめに

近年，ファカルティ・ディベロップメント（以下FDと略す）について，日本の高等教育，大学関係者の間でも関心が高まっている[1]。FDは大学審議会（1998）によると「大学の理念・目標や教育内容・方法についての組織的な研究・研修」と説明されている。大阪大学においては平成16年度以降，大学全体としてFDを担うのは大学教育実践センターとなっているが，これまでも，例えば英語による講義との関連でFDに関する取り組みがなされてきた。たとえば，留学生センターにおいては短期留学特別プログラムとの関連でFD関連の企画を行ってきた[2]。また基礎工学研究科においても平成14年に「英語による講義法」に関する教育セミナーを行った。

また大阪大学留学生委員会留学企画部会[3]においても大学国際化と留学交流の観点から種々の検討がなされた。その中で大阪大学における英語による講義の質の向上も重要な課題の一つとなった。平成15年前半には大阪大学が協定を締結している北米及びアジアの大学数校へ教員が派遣され，FDに関する調査を行った。この調査に基づき，平成15年12月には北米におけるFDにおいて実績と評価の高いカナダ・マギル大学に教員1名が派遣され，マギル大学の教員と一緒に5日間のFDワークショップに参加した[4]。

この実績に基づき，平成16年度には「教育研究環境の国際化促進調査事業」の予算配分を得て，「教育の国際化推進のためのFD事業：英語による講義のためのワークショップ」（以下，FDワークショップと略す）が実施された。本稿ではこのFDワークショップについて報告したい。

Ⅱ．FDワークショップ実施概要

このFDワークショップの開催通知及び実施概要を資料1に示す。実施にあたり，実施委員会が構成された。そのメンバーは大学教育実践センター長，留学生センター長をはじめ，大学教育実践センター及び留学生センター・部局の教員合計9名から構成された。実施委員会は会議及びメール上の議論や検討を経ながら準備を行った。

実施時期は予算確定の時期，マギル大学から招聘した講師（Denis Berthiaume氏）との日程調整等の事情により，平成16年10月下旬となった。このFDワークショップ参加者募集の案内は９月中旬に理事・国際交流推進本部長，大学教育実践センター長，留学生センター長名にて，各研究科長宛に文書が出された。

資料１にあるように，このFDワークショップは平日５日間の集中とし，毎日のテーマについて午前の部での講義と実習，午後の部での模擬授業（マイクロティーチング）を行った。毎日の積み重ね，そのプロセスを通して，ワークショップ参加者が自分の担当する科目についてシラバスを作成していくことと，そして午前プラス午後の全プログラムの参加者は午後にマイクロティーチングを２回経験することとされた。このうち午前の部については，大学教育実践センターに依頼して撮影を行い，記録することになった。

実際の参加申し込み者は10名だった。資料２に参加者を紹介する。この10名には午前の部のみの参加者１名，そして当初の参加申し込みが少なかったため，招聘する講師とも相談の上，参加を認めた一部参加の２名も含む。

Ⅲ．マギルスタイルFDワークショップ

今回のFDワークショップはカナダ・マギル大学から経験豊富な講師を招聘して，マギルスタイルにて行った。このスタイルのFDワークショップはマギル大学のCenter for University Teaching and Learning[5]において，教育心理学や高等教育の専門家が実績と改善を重ねて実施してきたもので，北米でも高い評価を得ている（例：Saroyan & Amundsen, 2004）。

ところでマギルスタイルFDワークショップはなぜこのようなプログラムになっているのだろうか。以下にその理由を，マギル大学の講師Berthiaume氏の説明から紹介する[6]。

ここではマギルスタイルの特徴のいくつかをあげておきたい。第一に，マギルスタイルでは，単に教授方法のテクニックについて教えるのではなく，むしろワークショップ参加者のTeachingとLearningについての考え方の変革を目指すものである。もちろん参加者は教授法のテクニックについても学ぶが，それはインストラクター（講師）が実際にワークショップを行いながら，それらのテクニックを使うことを通して，実際に参加者が学習していくことになる。

このワークショップを通して，これまで参加者が当然と思っていたTeachingとLearningについての考え方を見直し，変えていくことがもっとも重要である。そのために，参加者が自分自身で疑問を持ち解決をしていくプロセスをインストラクターがサポートすることを通して，参加者自身が大学における教育者として自分の教育について意識し自分で考えていく“Autonomy”（自律性）を持てるようにすること，“Discovery Learning”（発見学習）と“Reflective Practice”（反省的練習）を融合したものともいえる。参加者が自分自身で疑問を持ち考えることができるようになると，それまで当然と思っていたことを見直し，より適切な形に合わせていくことになる。

第二に，このワークショップは，学習というものが，“Cognitive”（認知）だけでなく“Affective”（感情）も意識した教授法のほうがより効果がある，という理論に基づいている。ワークショップでの経験的なアプローチ（自分自身の科目についてシラバスを作成していくことと，午後にマイクロティーチングを行うこと）は，参加者の“Cognitive”（認知）と“Affective”（感情），（そして実際にやってみるというPsycho-motor（精神運動），）すべてを意識したものである。このような認知と感情の側面からの変革について，専門的には“Transformational Learning”（変換学習）と言われている。

Ⅳ．FDワークショップを終えて：参加者の声

このように教育心理学と高等教育における理論とマギル大学での長年の実績を基に改良を重ねられて今日のマギルスタイルのFDワークショップのスタイルとなっている。このマギルスタイルのFDワークショップを大阪大学で初めて実施してみて，どのようなワークショップとなったのだろうか。今後の大阪大学でのFDを考える上でも，今回実施した結果について検討する必要がある。

このFDワークショップ終了後に参加者から１．良かった点，２．改善点，３．その他自由意見，についてメールにて感想を募った。参加者からの回答について，可能な限り参加者の言葉にて，整理すると以下のようになる。

１．良かった点

（ａ）ワークショップについて

（１）コースデザインについてグローバル（北米）スタンダードを体系的に学べた。

（2）ワークショップ全体の雰囲気が良かった。
（3）積極的に発言しやすい環境にあった。
（4）少人数で密度の濃い内容だった。
（5）参加型のワークショップでよかった。
（6）マイクロティーチングの体験が良かった。
（7）インストラクターがすばらしかった。
（8）実施側のサポートや準備がよくできていた。
（9）ワークショップ参加前後の試みの違いが参考になった。
(10) 授業改善のためのヒントが得られた。

（b）参加者間について
（1）参加者の構成や雰囲気の良さが発言しやすい雰囲気となった。
（2）異分野の先生方と知り合いになって意見交換できた。

（c）参加者個人の変化
（1）ものすごい刺激を受けた。変わっていく自分を見出せた。
（2）Learnerの視点を得られた。
（3）英語講義だけでなく，一般的な講義にも適用可能であることがわかった。

2．改善点

（a）開催や参加者募集の仕方
（1）主催者側と参加者の間で事前の認識に隔たりがあった。
（2）開催の仕方，募集の対象について，また，どのレベルでのFDを行うのか，部局全体，コースを考える，個人の講義のレベルアップを目指すのか，そのレベルわけをはっきりしたほうがいい。
（3）FDの目的をはっきりさせ，それに応じて参加者を募ったほうがいい。
（4）トップダウンだけでなく，直接教員に連絡すれば，本当に参加を望む教員が増える可能性もある。

（b）開催時期
（1）学期中はきつい。
（2）学期中はずして開催するほうが，理解も得られ，積極的な参加が得られる。
（3）より集中できる環境の設定：宿泊して，完全に日常業務から隔離する。

（c）ワークショップについて
（1）マイクロティーチング時間の増加。
（2）FD前後で授業がどのくらい良くなったかデータがほしい。

3．その他

（a）ワークショップについて
（1）5日間全てでなくても，1，2日のオブザーバーも認めるほうが良い。
（2）interactiveな仕方で英語での授業を行ううえでは実践的な訓練も必要。
（3）修了証のようなものがほしい。
（4）何かインセンティブを設ける。

（b）日本・大阪大学というコンテクストから
（1）今回の経験をどう生かしていけるのか，共通教育及び専門教育のカリキュラム委員会等とも連携して議論していく必要がある。
（2）国内のFD先進大学からの参加や参考文献も共有したほうが良い。
（3）日本人学生の特徴に合わせた方法論を確立する必要もあるのでは。

（c）参加する教員について
（1）これからも多くの教員が参加出来たら良い。
（2）教員の教育に対する意識改革も必要。
（3）特に若手教員のFDとすれば，コースデザインのみならず，研究生活にも役立てる要素がある。

V．考　察

今回のFDワークショップは，参加者からの改善点としての意見にもあったように，開催時期の問題や開催趣旨や募集が十分に参加者に伝わらなかった面があり，当初参加者の側に本意でなく参加した参加者が多数を占めた。しかし，実際ワークショップが始まり，プログラムが進む中，参加者がこのワークショップの趣旨を理解するにつれて，積極性も高まり，満足度も上がった。

参加者自身が自分の担当科目のシラバスについて具体的に考え，感じるとともに，実際にマイクロティーチングを行うことを通して，また，互いのフィードバックを通して，Teaching（教えること），またLearning（学ぶこと）についての意識変革，少なくとも考えるきっかけとなった。そして最終的にはこのFDワークショップの重要な意義を認識するとともに実感して終えたといえる。今後FDワークショップ終了後の参加者へのフォローアップが重要になることは，講師のBerthiaume氏も指摘していたところであるが，FDワークショップ終了後間もなく，参加者間でのメーリングリストが作られたのはその一歩と言える。

その一方で，今回のFDワークショップを終えて，課

題も明らかになった。以下，今後マギルスタイルでワークショップを実施するにあたり配慮する必要がある点について具体的に提案したいと思う。

1．実施時期

今回は予算や招聘する講師の事情により，学期期間中の開催となったが，次回は学期期間中をはずし，たとえば，前期学期終了後の8月あたりに行うことで，関心のある教員が参加しやすい時期に開催することが必要である。

2．ワークショップ日程

毎日のテーマについて積み重ねていく，というこのマギルスタイルのFDワークショップの内容からも，5日間というスケジュールは維持したい。一部だけの参加であると，テーマごとの関連や，毎日の作業の積み重ねの意味を理解することが困難である。

また，午後のマイクロティーチングの体験は不可欠であり，複数回のマイクロティーチングを必ずワークショップに入れる必要がある。

3．開催案内と参加者募集

今回のFDワークショップは英語による講義のためのFDということであった。英語を使用し，第二外国語として英語を使う観点についての言及はあったものの，ワークショップ全体としては英語という使用言語についてではなく，むしろ，Learningを中心にしつつ，教えるということについて体系的に学ぶことだった。そして自分の担当の科目についてCourse Outlineを作っていくことを通して，実践的に学ぶワークショップであった。英語に限らず日本語の講義に参考になる，ということを肯定的に評価する参加者と，そうでない参加者がいたことを考えると，どんな目的のFDかより明確にする必要がある。

また，どんな教員の参加を求めるのかも更に明確にする必要がある。特に，部局を通して推薦を依頼する場合，参加者に部局でどのような役割を期待するのか，より明確にする必要があると思われる。部局から推薦を依頼する方法のほかに，関心のある教員に参加を呼びかける方法として，今回の参加者の意見にあったように，教員全員に案内を送ることも一つの方法として考えられる。

Ⅵ．終わりに

今回のFDワークショップは，様々な関係者の協力を得て，実施することができた。大阪大学の橋本日出男理事・国際交流推進本部長を始め，高杉英一大学教育実践センター長，辻毅一郎留学生センター長，古城紀雄留学生センター副センター長を含む実施委員会委員の先生方，そして研究協力部留学生課を中心としてお世話になった方々に心より御礼申し上げたい。

そして，このFDワークショップの記録のために，ワークショップ期間中午前の部を全てに立会い，撮影いただいた大学教育実践センター岩居弘樹教授と松河秀哉助手，そしてアシスタントとして活躍したマギル大学交換留学経験者でもある文学部4回生馬渕恵理さんに対しても感謝申し上げたい。

また，学期期間中超多忙なスケジュールの中から，このFDワークショップに参加してくださった教員の先生方にもお礼を申し上げたい。先生方の積極的な意欲と努力による参加なくしてはこのFDワークショップが密度の濃い有意義なものとはならなかった。

更にこのFDワークショップは，大阪大学と協定校であるカナダ・マギル大学の協力なくしては実現できなかった。平成15年のマギル大学Center for University Learning and TeachingでのFDワークショップに大阪大学教員の参加を快く認めていただいた。またそのワークショップ期間中，ワークショップ実施側の視点も得られるようにとの配慮から，実施メンバーのミーティングにも参加させていただいた。そして16年度に大阪大学でマギルスタイルでワークショップを実施するにあたり，日程調整をはじめ，ワークショップ講師として経験及び評価の高い講師の招聘が可能となるよう尽力していただいた。こうしてマギル大学から招聘したDenis Berthiaume氏の多大な尽力により，ワークショップ参加者の高い評価へとつながった。マギル大学への感謝の気持ちは尽きない。

今回のワークショップ実施の経験と今後への改善点を踏まえ，次回のFDワークショップ開催に向けて，引き続き関係各位と協力しながら進めていきたい。

注：

1．平成10年の大学審議会による答申『21世紀の大学像と今後の改革方策について－競争的環境の中で個性が輝く大学－』，また平成12年の答申『グローバル化時代に求められる高等教育の在り方について』においても「大学の理念・目標や教育

内容・方法についての組織的な研究・研修（ファカルティ・ディベロップメント）」の実施推進の必要性が述べられている。またＦＤ関係の文献の中には米国の大学の授業改善の取り組みを訳したもの（例：香取，1995；香取，2002）や，日本私立大学のＦＤについての取り組み（日本私立大学連盟，2001）などがある。

2．「国際交流科目」は大阪大学短期留学特別プログラム（OUSSEP）留学生を対象として英語にて開講されているが，大阪大学の一般学生も受講できるようになっている。留学生センター短期留学担当は「国際交流科目」を担当する教員向けにガイダンスを行ってきている。

3．平成16年４月の大阪大学法人化に伴い，留学生委員会は国際交流委員会として一本化されたため，現在は存在しない。しかし平成14年度に留学生委員会の下に組織されたこの留学交流企画部会は，大阪大学全体の留学交流に関連する様々な検討課題について議論検討を行った。

4．平成15年12月のマギル大学でのワークショップには筆者が派遣されたが，この派遣は上述の留学生委員会から提案された企画の一つとして，平成15年度の総長裁量経費事業として行われた。そして平成16年２月には同じ総長裁量経費事業として開催した大阪大学教員FDセミナー「国際的スタンダードに適った授業とは - 必要とされる工夫・改善とノウハウ」において，マギル大学でのワークショップ参加報告を行った。

5．この“Centre for University Teaching and Learning”は現在“Teaching and Learning Services”という名称の組織となっている。

6．以下は専門用語も含めBerthiaume氏による英語での説明を筆者が日本語に訳した。

引用文献：

香取草之助監訳，2002年，『授業の道具箱（Tools for Teaching/Barbara Gross Davis）』，東海大学出版会。

香取草之助監訳，1995年，『授業をどうする！－カリフォルニア大学バークレー校の授業改善のためのアイデア集』，東海大学出版会。

大学審議会，1998年，『21世紀の大学像と今後の改革方策について（答申）－競争的環境の中で個性が輝く大学－』，平成10年10月26日大学審議会。

大学審議会，2000年，『グローバル化時代に求められる高等教育の在り方について（答申）』，平成12年11月22日大学審議会。

日本私立大学連盟編，2001年，『シリーズ大学の教育・授業を考える　3．大学の教育・授業の未来像－多様化するFD』，東海大学出版会。

Saroyan, Alenoush & Amundsen, Cheryl (Eds.), 2004, “Rethinking teaching in higher education: From a course design workshop to a faculty development framework,” Sterling, VA: Stylus.

資料１　FDワークショップ開催通知及び実施要領

平成16年９月15日

各研究科長殿

理事・国際交流推進本部長　橋本　日出男
大学教育実践センター長　高杉　英一
留学生センター長　辻　毅一郎

「教育の国際化推進のためのFD事業：英語による講義のためのワークショップ」
開催通知と参加者推薦依頼

大学の国際化推進は本学としても重要課題と考えられており，研究活動面のみならず，教育面においても関心を高めてゆく必要があります。

この度，今年度の「教育研究環境の国際化促進調査事業」の予算配分を得て，「教育の国際化推進のためのFD事業：英語による講義のためのワークショップ」を別紙要領に従って，大学教育実践センター及び留学生センターの主催により開催することになりました。本ワークショップは大学全体として教育面での国際化を目指すとともに，FDへの関心を高めるため，全ての研究科より，適任者として推薦いただいた教員を対象に実施するものです。

つきましては，貴研究科において，英語による講義を現在担当している，もしくは担当予定の教員の中から，意欲があり，将来貴研究科において「英語による講義に関するFD」について中心的役割を担っていくことが期待されている教員１名のご推薦をお願いいたします。本ワークショップは午前の部５日間および午後２日間という短期

集中の全プログラムへの参加を必須としており，被推薦教員へのご配慮を併せてお願い致します。

おって，貴研究科において複数の推薦者がいる場合は，上記の全プログラム参加者１名に加えて，午前の部５日間のみのプログラムへの参加教員１名を併せて，合計２名までを推薦下さるようお願い申し上げます。

なお，本ワークショップは国際交流推進本部の全面的支援のもと，その開催にあたっては，本学の教育面とりわけFDに関する中心的役割を今年度より担うこととなった「大学教育実践センター」と，留学交流においての実績を持つとともに英語による講義に関するFD事業をすでに平成14年度より総長裁量経費等により展開してきた「留学生センター」が中心となって，実施委員会を組織しております。また，講師はこの分野において長年の実績と高い評価を得ているマギル大学から専門家を招聘し，有効で着実な成果を上げるために短期集中とし，講義・実習・マイクロティーチングという模擬授業と批評を組み合わせた形式で実施するものです。

詳細は別紙をご参照の上，貴部局からの推薦者の参加申込書を平成16年10月５日（火）までに留学生センター有川宛，メール（tarikawa@isc.osaka-u.ac.jp）もしくはファックス（06－6879－7075）にてご連絡いただきますようお願いいたします。

照会先：留学生センター助教授　有川友子
（tarikawa@isc.osaka-u.ac.jp　内線7075）

実施要領

期　　間：平成16年10月25日（月）－10月29日（金）の５日間
時　　間　Ａ：午前の部（９：30－12：00）講義および実習
　　Ｂ：午後の部（13：00－16：00）マイクロティーチング
場　　所：吹田キャンパス　ICホール４階会議室
対　　象：英語による講義を現在担当している，もしくは担当予定の教員で，意欲があり，今後部局においてFDに関して中心的役割を担っていくことが期待されている教員
使用言語：英語
参 加 者：各研究科による推薦
　　Ⅰ．全プログラム参加者１名
　　（Ａ：午前の部５日間　＋　Ｂ：午後の部２日間（月・水曜もしくは火・木曜））
　　Ⅱ．午前の部のみの参加者
　　（希望者が２名以上ある場合，Ａ：午前の部５日間の参加者１名を追加で推薦可能）
注意事項：＊推薦された教員は全プログラムに参加すること。
　　＊Ⅰ．の参加者のＢ：午後の部の日程については，参加者の専攻分野等のバランスを考慮して，本ワークショップ実施委員会が決める。
申し込み：別紙参加申込書に記入の上，メール（tarikawa@isc.osaka-u.ac.jp）もしくはファックス（06－6879－7075）にて連絡。
締め切り：平成16年10月５日（火曜）
今後の予定：締め切り後，本ワークショップ実施委員会が午後のマイクロティーチングの日程について参加者を割り振り，参加者本人に連絡するとともに，その他プログラムの詳細については参加者本人と連絡をとっていく。

＊この他，本ワークショップに関わることは，本ワークショップ実施委員会が対応する。

ワークショップの概要

目　的		大阪大学の教育の国際化推進の一環として，英語による講義のFDワークショップを行う。参加者は本ワークショップを通して，自分の担当する（予定の）英語による講義のシラバスを作成し，国際的な観点から大学においてより良い講義を行うことについて学ぶ。
内　容		ワークショップにおける毎日のテーマ（予定　1日目：Content，2日目：Outcome，3日目：Strategy，4日目：Assessment，5日目：Next Step）について，参加者は講義を受け，実習にて自分の担当する（予定の）講義のシラバスを検討していく。ワークショップ終了時には，シラバスを完成させる。 また，午後2回のマイクロティーチングを通して，講義スタイルや方法についても実践的に学んでいく。
A午前の部	講　義	その日のテーマについて，FDの経験豊富なマギル大学の講師から講義を受ける。 外国語としての英語を使用して大学で講義を担当することについてのポイントも含む。
	実　習	その日のテーマについての講義を踏まえ，自分の担当する科目について具体的に検討し，ディスカッションを行い，シラバスを作成する。
B午後の部	マイクロティーチング	各研究科からの全プログラム参加者14名は二つのグループに分かれ，午後2回（月・水曜班と火・木曜班）のマイクロティーチングを行う。 参加者は自分の担当する科目について1人あたり10－15分の模擬授業を行い，講師および他の参加者からのコメントやフィードバックを得る。模擬授業はビデオ撮影後，参加者自身にテープが渡される。1回目のマイクロティーチング終了後，参加者は自分の模擬授業のテープを観て，改善点等を検討し，それを踏まえて準備を行い，2回目のマイクロティーチングを行う。

ワークショップ実施委員会名簿

基礎工学研究科	教　授	久保井　亮　一
医学系研究科	教　授	山　本　容　正
大学教育実践センター	センター長	高　杉　英　一
	教　授	山　成　数　明
留学生センター	センター長	辻　　毅一郎
	副センター長	古　城　紀　雄
	教　授	北　浜　榮　子
	助教授	近　藤　佐知彦
	助教授	有　川　友　子（委員長）

参加申込書

送付先：留学生センター　有川宛
（tarikawa@isc.osaka-u.ac.jpもしくはファックス：06－6879－7075）

研究科：＿＿＿＿＿＿＿＿

Ⅰ．全プログラム参加者（A：午前の部５日間　＋　B：午後の部２日間）

氏名：（日本語）＿＿＿＿＿＿＿＿　（英語）＿＿＿＿＿＿＿＿

肩書：＿＿＿＿＿＿

電話（内線）：＿＿＿＿＿＿＿＿　ファックス：＿＿＿＿＿＿＿＿

E－mail：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

専門分野：（日本語）＿＿＿＿＿＿＿＿　（英語）＿＿＿＿＿＿＿＿

英語による講義（予定）の科目名：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

Ⅱ．午前の部だけの参加者（A：午前の部５日間）＊希望がある場合

氏名：（日本語）＿＿＿＿＿＿＿＿　（英語）＿＿＿＿＿＿＿＿

肩書：＿＿＿＿＿＿

電話（内線）：＿＿＿＿＿＿＿＿　ファックス：＿＿＿＿＿＿＿＿

E－mail：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

専門分野：（日本語）＿＿＿＿＿＿＿＿　（英語）＿＿＿＿＿＿＿＿

英語による講義（予定）の科目名：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

資料2　FDワークショップ参加者

部　局　名	職名	氏　名
法学研究科	講　師	瀬戸山　晃　一
理学研究科	講　師	菊　池　和　徳
医学系研究科	助教授	石　蔵　文　信
歯学研究科	助教授	原　田　英　光
基礎工学研究科	教　授	北　川　勝　浩
基礎工学研究科	助教授	馬　越　　大
言語文化研究科	助教授	越　智　正　男
生命機能研究科	助教授	小　田　洋　一
大学教育実践センター	助教授	望　月　太　郎
留学生センター	助教授	近　藤　佐知彦

大阪大学における教育の国際化への取り組み：「教育の国際化推進のためのFD事業：英語による講義のためのワークショップ」を終えて

大阪大学留学生センター助教授　　有　川　友　子

キーワード：大学教育の国際化，高等教育，FD，ワークショップ，北米（カナダ・マギル大学）

要旨

本稿では，平成16年10月に大阪大学にて実施した英語による講義のためのFDワークショップについて報告した。このFDワークショップは大阪大学の協定大学でもあり，教育心理学，大学教育，そして，FDについての研究および実践において高い評価を得ているカナダ・マギル大学から，専門家を招聘して，平日5日間，講義，実習，マイクロティーチング（模擬授業）を行った。今回は開催時期の問題などがあり，参加者数は10名と少なかった。しかし，参加者はこのワークショップの重要な意義を認識し，満足していたことがわかった。参加者からの意見をまとめるとともに，次回のワークショップ実施に向けての課題について検討した。

（ありかわ　ともこ　留学生センター助教授）